



医療の知識を基本に据えたソーシャルワークを

山田 登喜子さん

NPO法人ゆうらいふ理事長 看護師・社会福祉士・ケアマネジャー

トピックス性のある活動をされている看護職の方をご紹介します。
今号は、看護師・社会福祉士・ケアマネジャーの資格を活かし、「医療」と「福祉」の両面から総合的生活相談を行う山田登喜子さん。生活相談の基本に看護職としての視点を大切にしながら、利用者の生活の継続を支援しています。

NPO法人ゆうらいふ居宅介護支援事業所は、サービス担当者会議に集まってきた医師・看護師・ヘルパーなど各事業所のスタッフで活気に溢れていた。5人のケアマネジャーがそれぞれ事業所内の一角をカンファレンススペースとし、担当する利用者に関わるスタッフを集めてカンファレンスを開始する。

理事長・山田登喜子さんはこの日、ケアマネジャーとして4ケースのカンファレンスを行った。次々に山田さんの前にケースごとにスタッフが集まり、話し合いが進められていく。

「2004年4月から毎月第三木曜日にカンファレンスを開催することに決めています。こうやってそれぞれのケースに関わる事業者さんに一度に集まってもらうので、事業者さん同士の交流の場になりますし、自分以外のケアマネジャーが担当している事業者さんの顔を見ることもできます。何より嬉しいことは、こうやって顔を見せ合って話し合うようになって、ゆうらいふの運営理念である“利用者本位”をケアチームでしっかり共有することができるようになったことです」

山田さんは、誇らしそうに話し始めた。ピンと張った背中、きびきびとした口調。そして満面の笑顔が人に安心感をもたらす。“ソーシャルワーク”を使命と信じ、利用者の生活の継続をいかに支援していくかに日々心を砕く。山田さんとソーシャルワークの出会いは、30年あまり前に看護師として勤務していた病院で、何気なく医療ソーシャルワークに興味を持ったことが始まりだった。



PROFILE

やまだ ときこ 1971年宮崎県立日南高等看護学校卒業後、宮崎県立病院、虎の門病院、京都大学医学部附属病院、野洲町役場福祉保健課等に勤務。91年佛教大学社会福祉学科を卒業し、社会福祉士の資格を取得。95年社会福祉士事務所を開設。98年滋賀県守山市にNPO法人ゆうらいふを立ち上げ、2000年に居宅介護支援事業所を開設した。



ゆうらいふ居宅介護支援事業所でのカンファレンスの様子。



悩んだ末にたどり着いた道

「自分にできることで人の役に立てることはないかとずっと悩んでいました。結婚を機に病院を辞めて町役場の保健福祉課に勤めることになり、そこで予防や健康診断などの企画を通じて、地域の医療・保健・福祉の制度を学ぶ機会を得ました。役場の予算管理・運営や補助金の申請など、お金に関することもずいぶん勉強しました。そして、病院で医療ソーシャルワークに興味を持ったこともあり、役場に務めながら佛教大学社会福祉学科を卒業し、社会福祉士の資格を取ったのです。その後、デンマークやイギリスなどの高齢者福祉医療制度を視察し、先進的な取り組みに衝撃を受けました」

山田さんは、さまざまなことを学び経験しながら悩み続けた末、経済的に自立でき人の役に立てる職業として“ソーシャルワーク”を選んだ。1995年には独立し、念願の社会福祉士事務所を開設した。その後、介護保険法が成立し、ケアマネジャーの資格も取得、2000年の法施行とともに居宅介護支援事業所を立ち上げた。

居宅介護支援事業所を開設する上で役立ったのは町役場時代に身に着けた予算の運営管理など、経営に関するノウハウだ。

「事業所を開設する前に、家賃・光熱費・電話代・事務職への賃金などを、どのぐらいの収益を上げれば支払っていけるのかシミュレーションしました。経済的な裏付けがなければ事業所を継続していきません。利用者さんの生活を支援していく上で、“経済的に苦しいので途中でやめます”では無責任でしょう。“継続”はとても重要なことなのです」

そして、もう1つ“継続”のために大切なことは法的根拠に基づき責任範囲を明確にすることだと言う。「自分ができることとできないことを法に照らし合わせはっきりさせて利用者さんに説明しておけば、燃え尽き症候群になることもなくなります」。それらを考え合わせ、山田さんが管理

者として事業所の運営で気をつけているポイントは、法令遵守、リスクマネジメント、利用者本位、経営管理の4つだ。

それでは、1人のケアマネジャーとしては、どのように利用者に関わっているのだろうか。

看護師としての体験が利用者との関わりを深める

「看護師である私は、利用者さんの身体状況から予後を予測していきます。その方の基本的疾患は何か、症状はどのようなものかによって、生活設計は全く変わってきます。相談業務をする上で医療の知識はとても重要なのです。さらに、どこで誰に見守られてどのように死にたいのか、人生のゴールまで見ずえて深く関わっていきます。そして、社会福祉士として、あらゆる制度やサービスを駆使して、利用者さんの希望に添ったライフプランを立てるのです。医療と福祉、どちらも利用者さんの生活には欠かせないもの。私はこの2つの知識と経験を活かしてケアマネジメントを行うことで総合的な生活支援が実践できると思います」。居宅介護支援事業所のケアマネジャーは全員が看護職。「医療」を基本に据えた「福祉」を実行する山田さんならではのこだわりだ。

「看護職って本当に素晴らしいと思います。医療の知識を基に、人の死や遺族の悲しみに触れさせていただくことによって、自分自身が生きるって何か、死ぬってどういうことなのかを常に考えさせてくれます。ソーシャルワーカーとして利用者さんやご家族と他の職種よりも深く関わっていけるような気がするのです」と最後に柔らかな笑みを浮かべながら話してくれた。

(取材 / 編集部・阿部真里子)



● 山田登喜子さんの心に残る“看護職でよかった”瞬間

利用者さんのほっとした表情を見た時

今の私の名刺には、社会福祉士・看護師・ケアマネジャーという資格が3つ並記されています。利用者さんに名刺を差し出すと必ず「あぁ、看護師さんなんですね」と言われ、とてもほっとした表情をされます。それから安心していろいろな相談を私に委ねてください。そんな時に「あぁ、看護職でよかった」と心の底から思います。